

望ましい予測行動とはどのようなものか

神谷 直樹 統計思考院 特任研究員

【研究背景】

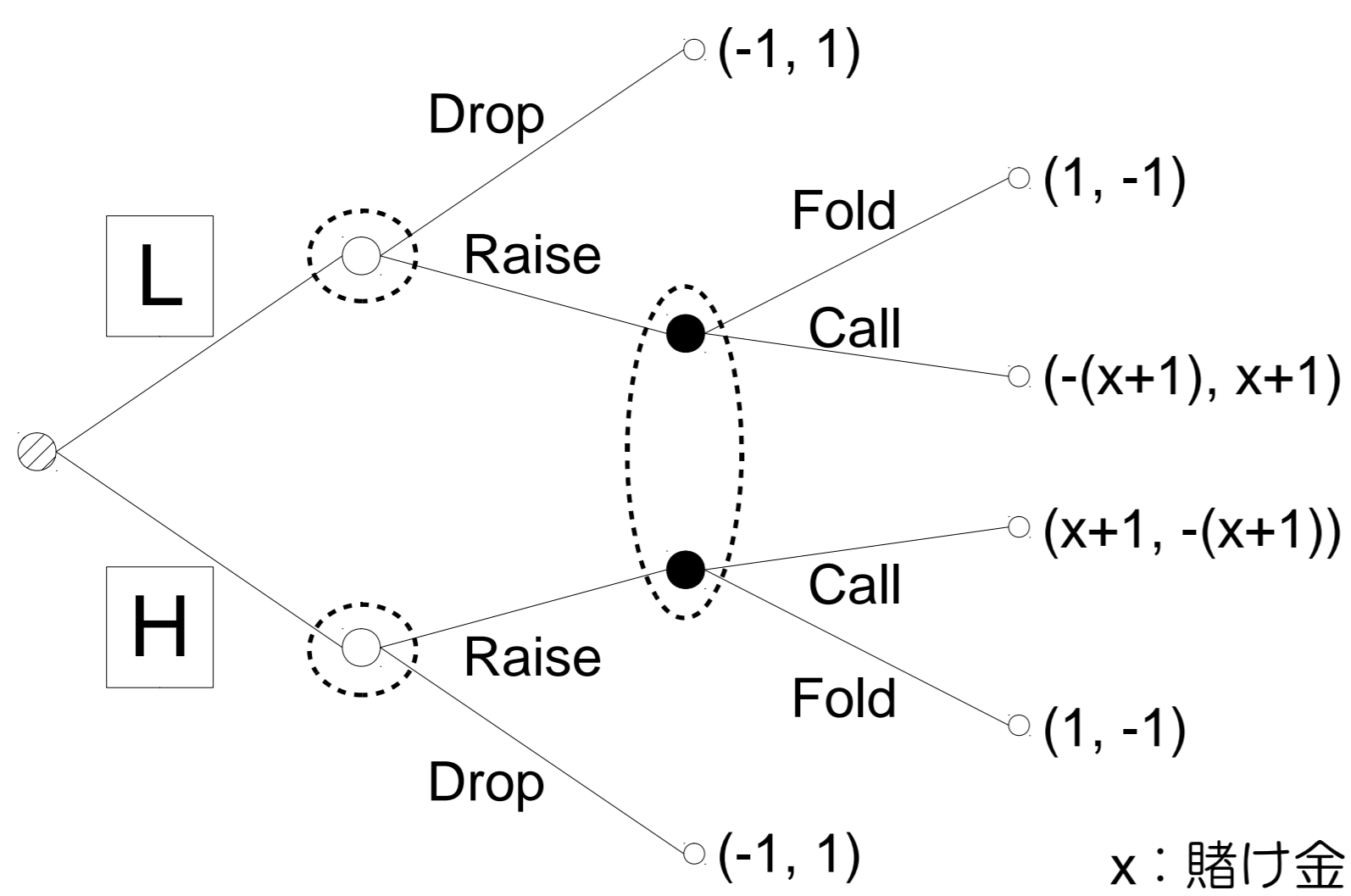
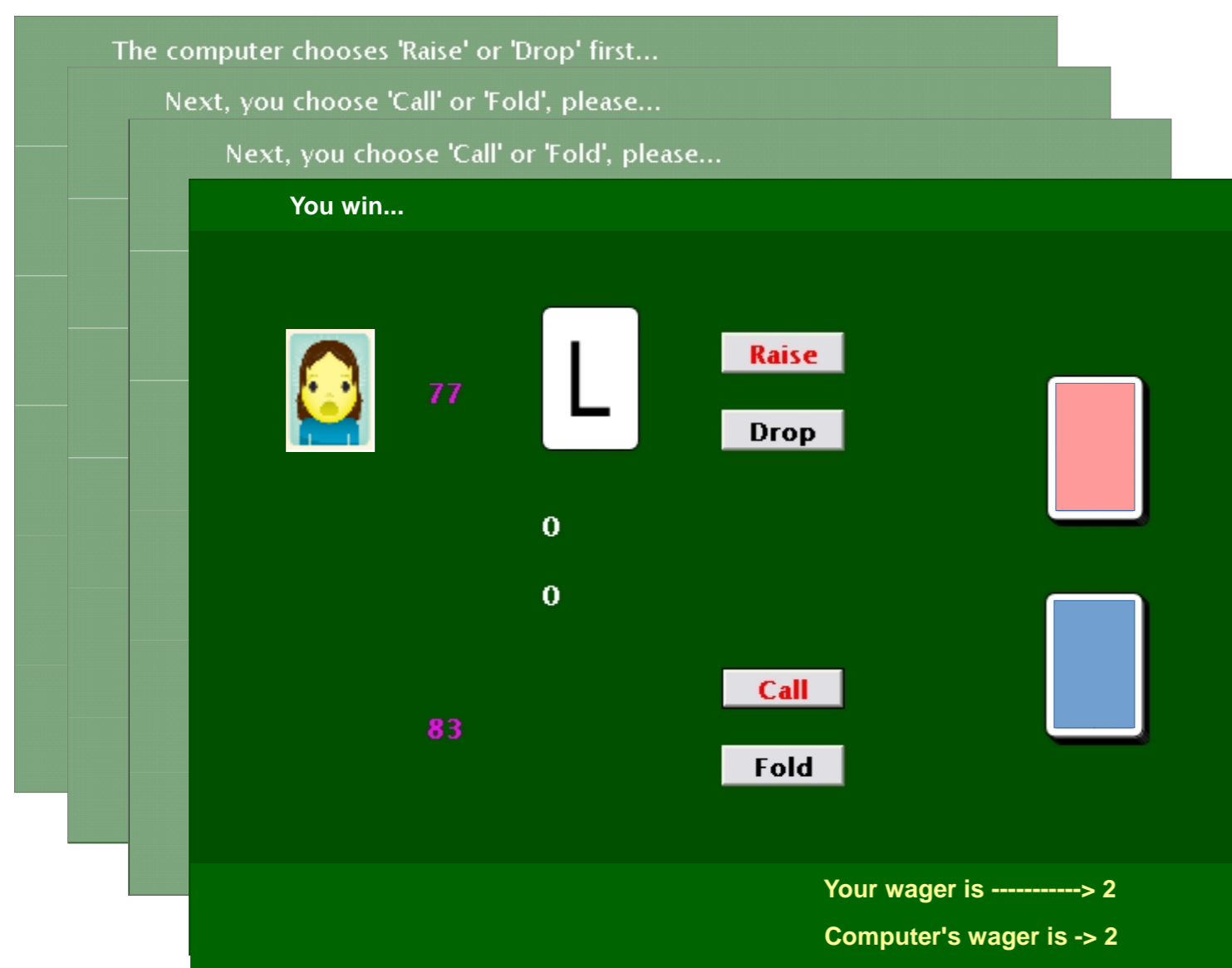
私たちは何かをするときに、自分を含めた全てに注意を向けているに違いないと仮定していることが多いが、実際には何か行動を選択した後でなければそうしていたかどうか分からない(Fingrette, 2004)。

望ましい行動：当該行動の当事者と、当事者が所属する社会的集団の行動が強化される行動。

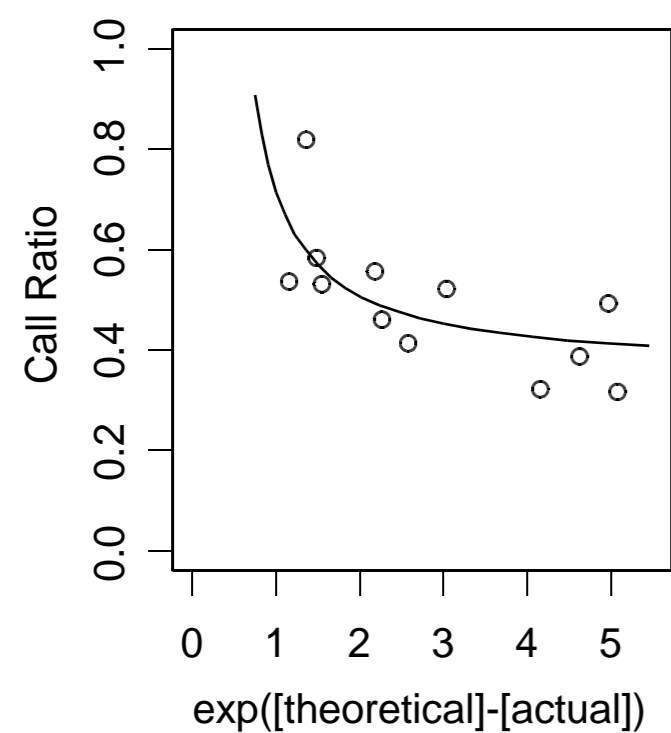
予測行動：選択行動の随伴性が1つの選択肢に対応した複数の選択行動結果の随伴性に対する弁別刺激になっており、選択行動の弁別刺激は個体の選択行動に依存して変化する状況における選択行動。

随伴性 (contingency)：行動手がかかり(弁別刺激)、行動、行動後続事象という3要素を行動の分析単位としたときの一まとまり。

【研究内容：予測ゲーム課題を利用した行動研究】



個体の予測行動の記述

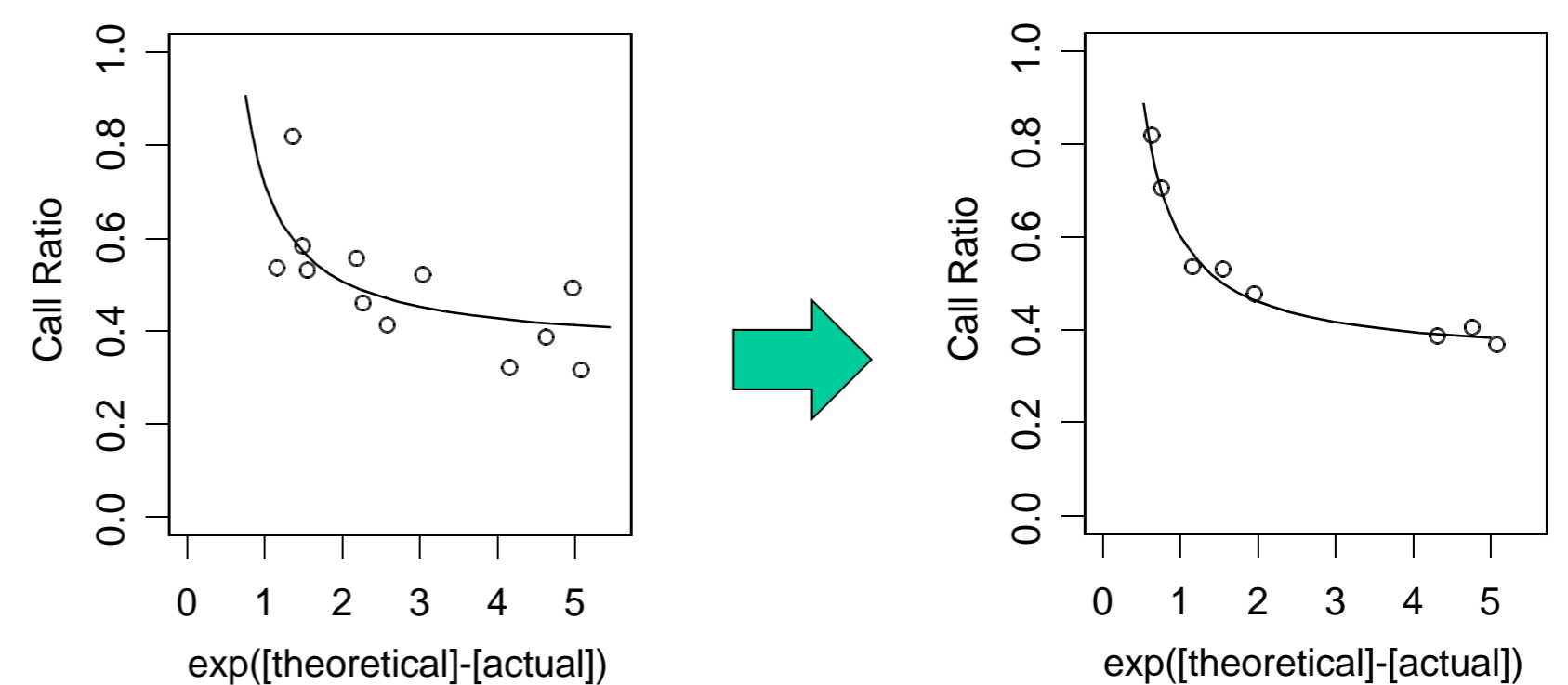


$$P(\text{Call}) = \alpha \cdot e^{-\frac{\ln(\beta)}{T}}$$

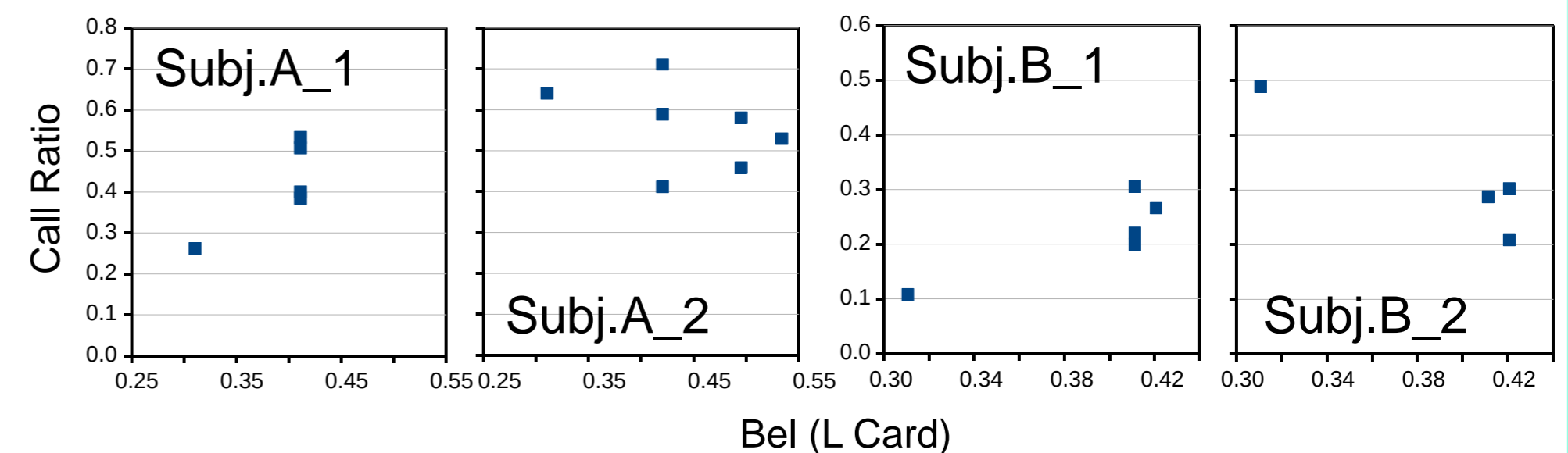
α : バイアス
 β : 弁別刺激 (選択行動の随伴性) に対する「感受性」
 T : 最適解からの乖離

個体の予測行動のコントロール (矯正法) (対象者の行動のコントロール)

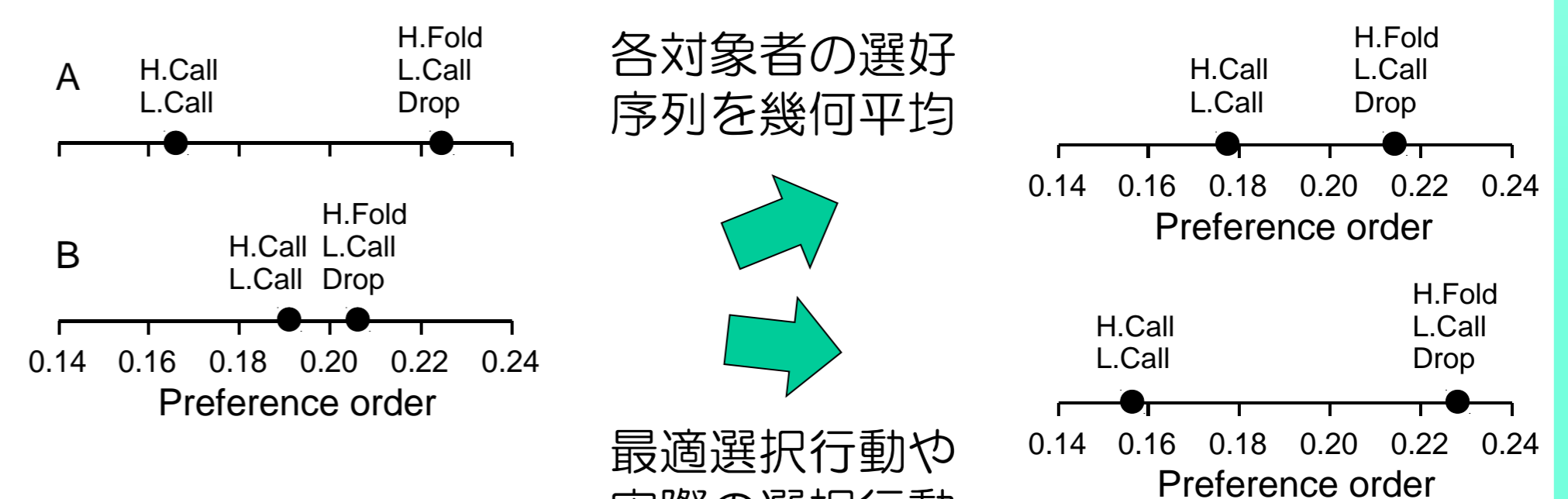
= (対象者の行動の理解)



最適ではない予測行動の記述の試み



予測行動の集計 (複数データのANP)



最適選択行動や実際の選択行動など、それぞれの一対比較行列において幾何平均を求めてから構造全体の処理をして選好序列を計算

予測行動の時系列分析 (環境変化の種類毎に行動とその後続事象間の因果関係の程度を分析)

【引用文献】

Fingrette, H. (2004). Mapping responsibility: Explorations in mind, law, myth, and culture. Chicago, IL: Open Court.